

令和4年度 あまっ子ステップ・アップ調査の結果について

尼崎市教育委員会

1 調査目的

学校は、児童生徒の学力と学習状況を把握することで、一人一人に応じた指導の充実や学習状況の改善を図る。また、教育委員会は、教育施策の成果と課題について検証し、その改善を図ることで、教育活動に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容ごとの人数（人）

学年	学力調査					生活実態調査
	国語	算数・数学	英語	社会	理科	
小学1年生	3,177人	3,179人	/	/	/	3,204人
小学2年生	3,029人	3,032人				3,080人
小学3年生	3,172人	3,174人				3,203人
小学4年生	3,185人	3,185人				3,237人
小学5年生	3,240人	3,242人				3,272人
小学6年生	3,209人	3,211人				3,242人
中学1年生	2,821人	2,826人	2,826人	2,831人	2,829人	2,839人
中学2年生	2,877人	2,881人	2,882人	2,886人	2,890人	2,895人

3 実施日

小学校…令和4年12月9日（金） / 中学校…令和5年1月12日（木）

4 学力調査の概況

学習指導要領に示されている目標や内容に照らしたテスト形式の全国共通の問題で、基礎的・基本的な内容（約70%）、発展的な内容（約30%）の定着度を調査した。

表1と表2は、同一母集団で昨年度の結果と比較した。

【表の見方】	
学力層別人数割合	………全国の総受検者（人数非公表）を得点順に25%ずつA～D層に分け、本市においてどの層にどれだけの人数がいるかを表した割合（%）
達成率	………「目標値」を上回った児童生徒の人数割合（%）
目標値	………各教科において「おおむね満足」といえる正答率（%）。その水準まで定着できていれば、次の学習内容に進むことができる目安として、設定されている。

(1) 小学校

表1 小学校における達成率と学力層別人数割合

		達成率 (%)	2022年度 学力層別人数割合 (%)					
			A層	B層	C層	D層		
一年	国語	78.4 (-)	25.6 (-)	26.3 (-)	25.3 (-)	22.7 (-)	2022	
	算数	85.1 (-)	29.6 (-)	29.4 (-)	21.7 (-)	19.3 (-)		
二年	国語	80.3 (+3.1)	25.0 (-0.9)	24.1 (+0.8)	24.3 (+0.6)	26.5 (-0.6)	2021 2022	
	算数	76.4 (-5.2)	25.6 (+1.0)	26.9 (0.0)	25.0 (+3.4)	22.5 (-4.5)		
三年	国語	72.5 (-3.9)	28.8 (+5.5)	24.7 (+0.4)	23.6 (-1.4)	22.9 (-4.5)	2020 2021 2022	
	算数	79.9 (+10.6)	28.3 (+5.6)	24.7 (0.0)	23.9 (-3.4)	23.1 (-2.2)		
四年	国語	75.5 (+13.6)	26.5 (+2.3)	23.8 (+0.1)	25.1 (0.0)	24.6 (-2.3)	2020 2021 2022	
	算数	75.3 (+1.4)	26.6 (+0.8)	25.1 (+0.6)	24.8 (+0.4)	23.6 (-1.8)		
五年	国語	75.9 (+4.0)	28.5 (+3.2)	26.1 (+1.2)	24.4 (-0.8)	20.9 (-3.6)	2020 2021 2022	
	算数	70.5 (-3.6)	30.1 (+4.0)	25.2 (+0.8)	22.8 (-1.3)	21.8 (-3.6)		
六年	国語	65.5 (-5.7)	25.1 (+1.6)	25.2 (+0.3)	24.0 (-1.5)	25.7 (-0.4)	2020 2021 2022	
	算数	78.8 (+10.5)	27.3 (+1.7)	26.0 (-0.6)	26.8 (+2.3)	19.9 (-3.3)		

※カッコ内の数値は、同一母集団（例：今年度の小4と昨年度の小3）における昨年度との差を示す。

※青色の網掛けは+3ポイント以上の改善、黄色の網掛けは-3ポイント以上の低下を表している。

(2) 中学校

表2 中学校における達成率と学力層別人数割合

		達成率 (%)	2022年度 学力層別人数割合 (%)					
			A層	B層	C層	D層		
一年	国語	72.2 (+7.7)	25.7 (+0.3)	24.6 (+1.2)	24.7 (+0.5)	25.0 (-1.7)	2020 2021 2022	
	数学	62.0 (-13.7)	31.5 (+6.2)	24.2 (0.0)	22.1 (-1.7)	22.2 (-0.5)		
	英語	63.5 (-)	27.7 (-)	24.8 (-)	22.4 (-)	25.1 (-)		
	社会	56.0 (-)	22.2 (-)	22.8 (-)	24.9 (-)	30.0 (-)		
	理科	70.4 (-)	22.9 (-)	25.2 (-)	24.2 (-)	27.7 (-)		
二年	国語	64.2 (+4.4)	23.8 (+2.0)	24.6 (-0.8)	26.5 (+1.1)	25.1 (-2.3)	2020 2021 2022	
	数学	59.2 (-6.1)	28.2 (-1.2)	25.1 (-0.8)	23.8 (+2.2)	22.9 (-0.3)		
	英語	55.6 (-1.2)	24.4 (-1.9)	25.9 (+2.1)	25.0 (+0.2)	24.7 (-0.4)		
	社会	49.8 (-2.3)	21.1 (+0.3)	24.2 (+1.4)	24.8 (0.0)	29.9 (-1.7)		
	理科	54.3 (-5.5)	23.9 (+0.5)	23.7 (-0.3)	24.9 (+0.9)	27.5 (-1.1)		

※カッコ内の数値は、同一母集団（例：今年度の中1と昨年度の小6）における昨年度との差を示す。

※青色の網掛けは+3ポイント以上の改善、黄色の網掛けは-3ポイント以上の低下を表している。

5 生活実態調査の概況

アンケート形式（主に4択）で、「①学びの基礎力、②社会的実践力、③学級力、④家庭学習力」の4つのカテゴリに基づく質問項目について調査した。

表3と表4については、同一学年集団で5年間の結果を比較した。

尚、同一学年とは、昨年度と同じ学年（例えば2019年度の小4と2020年度の小4）を指す。

表3 生活実態調査におけるカテゴリ別 平均スコア

	意識調査平均スコア																			
	①学びの基礎力					②社会的実践力					③学級力					④家庭学習力				
	2018	2019	2020	2021	2022	2018	2019	2020	2021	2022	2018	2019	2020	2021	2022	2018	2019	2020	2021	2022
小1	79.7	78.8	80.9	82.2	82.9	87.3	86.1	86.6	87.4	88.4	85.6	83.8	85.9	86.8	87.6	88.1	87.8	88.9	89.4	88.7
小2	77.6	78.6	78.2	80.3	80.8	86.6	88.1	84.6	86.5	87.3	79.6	80.8	80.5	82.9	81.6	91.0	91.8	91.5	91.7	92.1
小3	70.1	70.5	72.4	71.8	73.0	68.9	70.3	72.5	74.0	76.0	75.8	76.1	80.6	78.9	80.5	76.1	76.7	78.6	77.4	78.5
小4	63.1	65.8	65.9	66.9	66.0	62.2	65.4	65.4	68.4	67.6	67.2	69.4	71.8	71.7	69.7	68.5	71.4	71.6	71.7	70.6
小5	62.4	63.2	65.4	64.4	64.7	60.9	62.0	64.3	64.2	65.4	62.4	65.3	69.3	69.3	68.5	66.2	67.4	69.0	67.4	67.8
小6	63.1	63.4	64.0	65.3	64.4	62.4	62.6	63.8	66.2	65.9	64.1	62.2	66.1	69.0	68.8	65.2	64.7	66.0	66.4	65.0
中1	58.3	59.3	60.1	60.7	61.4	54.8	56.5	57.5	59.9	61.0	54.7	57.4	59.2	63.0	60.9	58.0	59.7	60.1	60.6	61.4
中2	56.4	57.2	59.0	59.8	59.3	53.9	55.5	57.5	58.8	60.0	54.8	56.4	59.6	62.3	63.2	54.4	53.9	57.6	57.7	57.5

※5年間の比較の中で、値が1番大きいものについて、赤字で示している。

【表の見方】

平均スコア・・・各質問の回答を「とても：3、まあ：2、あまり：1、まったく：0」で数値化し、カテゴリ別に0～100の間になるように数値化した値。スコアが大きいほど、肯定的な回答が多かったことを表している。

生活実態調査の中から、主な質問項目について肯定的に回答した割合を、経年で比較した。

表4 主な質問項目に肯定的に回答した割合

	調べたことを、パソコンを使ってまとめたり、発表したりすることができる。					授業では、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。					自分には、よいところがあると思いますか。					友だちをばかにしたりからかったりせず、一人ひとりの心や命を大切にする学級です。				
	2018	2019	2020	2021	2022	2018	2019	2020	2021	2022	2018	2019	2020	2021	2022	2018	2019	2020	2021	2022
小3	35.0	37.6	43.6	74.9	76.9	81.3	79.0	81.5	81.3	84.7	85.9	84.5	84.8	85.3	86.7	56.8	57.4	68.7	64.2	66.3
小4	47.4	51.6	54.0	80.6	79.5	69.3	74.0	76.0	77.3	77.6	79.1	83.1	82.5	82.8	83.7	56.9	58.0	67.5	63.8	62.5
小5	41.5	43.5	47.9	60.0	65.9	56.7	61.8	63.6	64.1	66.8	77.9	78.4	79.5	79.4	80.0	41.6	49.4	61.1	60.5	55.4
小6	45.4	48.2	50.5	67.2	66.6	60.4	62.0	62.7	67.2	69.4	77.9	76.5	75.6	76.8	77.9	44.5	43.5	54.6	59.1	59.9
中1	29.0	32.2	32.7	47.9	52.7	46.1	55.1	54.4	59.3	60.4	68.5	72.8	73.2	75.1	75.7	42.4	52.8	58.8	64.7	57.6
中2	27.6	33.7	34.5	47.1	50.0	40.5	51.2	53.6	57.7	61.1	69.3	67.6	73.0	73.7	75.7	48.0	51.4	63.1	66.8	64.5

※5年間の比較の中で、値が1番大きいものについて、赤字で示している。

6 結果のまとめ

(1) 学力調査

小学校（表1）・中学校（表2）に共通すること

・同一母集団における学力層別人数割合については、小学校2年生から中学校2年生において、全ての学年で昨年度よりD層の割合が減少している。

小学校（表1）

・小2の国語を除き、残りの学年で、昨年度よりA層の割合が増加した。
・小3と小5においては、他の学年と比較すると、C層とD層の大幅な減少、A層とB層の大幅な増加が見られ、全体的に学力の底上げが図られたと考えられる。

中学校（表2）

・中1の国語、中2の国語については、D層の割合が減少し、達成率が増加している。
・中1の数学については、他の学年や教科と比較すると、D層の割合が少なく、A層が大きく増加している。
・社会については、中1、中2ともにD層の割合が比較的大きいが、中2の社会では、D層が昨年度より1.7ポイント減少しており、A層とB層が合わせて1.7ポイント増加している。

(2) 意識調査

カテゴリー別平均スコア（表3）

同一学年集団における平均スコアの推移をみると、多くの学年とそれぞれのカテゴリーで肯定的な回答割合が増加しており、各カテゴリーにおける最大値は、2020年以降に集中している。特に、社会的実践力に関しては、6つの学年で、今年2022年が一番大きい値になっている。

各質問項目（表4）

◆「調べたことを、パソコンを使ってまとめたり、発表したりすることができる。」

この項目については、全ての学年で肯定的な回答割合が50%を超えてきている。令和2年度より、児童生徒に1人1台のタブレット端末が配付され、より一層ICTを活用した授業が実践されていると考えられる。

◆「授業では、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」

この項目については、小3以上の全ての学年で肯定的な回答が増加している。新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が、さらに進んでいると考えられる。

◆「自分には、よいところがあると思いますか。」

この項目については、小3以上の全ての学年で肯定的な回答が増加している。中央教育審議会¹によると、自己肯定感が高い児童生徒は、「挑戦心」、「達成感」、「規範意識」、「自己有用感」に関する意識が高い。また、他者との協働の中で、子どもたちが自分の役割を果たすとともに、その目標を達成した際に周りの大人たちがそれを認め、成功体験を感じさせることで、自己肯定感が高まっていくと報告されている。

¹ 中央教育審議会（第112回）配布資料。資料3-2 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓（ひら）く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（教育再生実行会議第十次提言本文・参考資料）

7 考察

学力層別人数割合において、総受検者に対するD層の割合は、令和3年度と比較して、小・中学校ともに減少している。（P2 表1小学校・表2中学校 参照）

また、このD層の割合の変化を、本調査が始まった平成30年度から令和4年度実施の5年間について着目し、次の学年（同一母集団）のD層の割合を比較した。

表5 同一母集団におけるD層の割合

		平成30年度		令和4年度	減少値
小学5年		小学1年	⇒	小学5年	
	国語	30.8%	⇒	20.9%	-9.9
	算数	37.7%	⇒	21.8%	-15.9
小学6年		小学2年	⇒	小学6年	
	国語	32.2%	⇒	25.7%	-6.5
	算数	32.8%	⇒	19.9%	-12.9
中学1年		小学3年	⇒	中学1年	
	国語	29.4%	⇒	25.0%	-4.4
	算数・数学	29.1%	⇒	22.2%	-6.9
中学2年		小学4年	⇒	中学2年	
	国語	34.7%	⇒	25.1%	-9.6
	算数・数学	31.6%	⇒	22.9%	-8.7

どの学年においても、D層の割合は、この5年間で減少しており、各校における基礎学力の定着に向けた取組の成果が表れている。

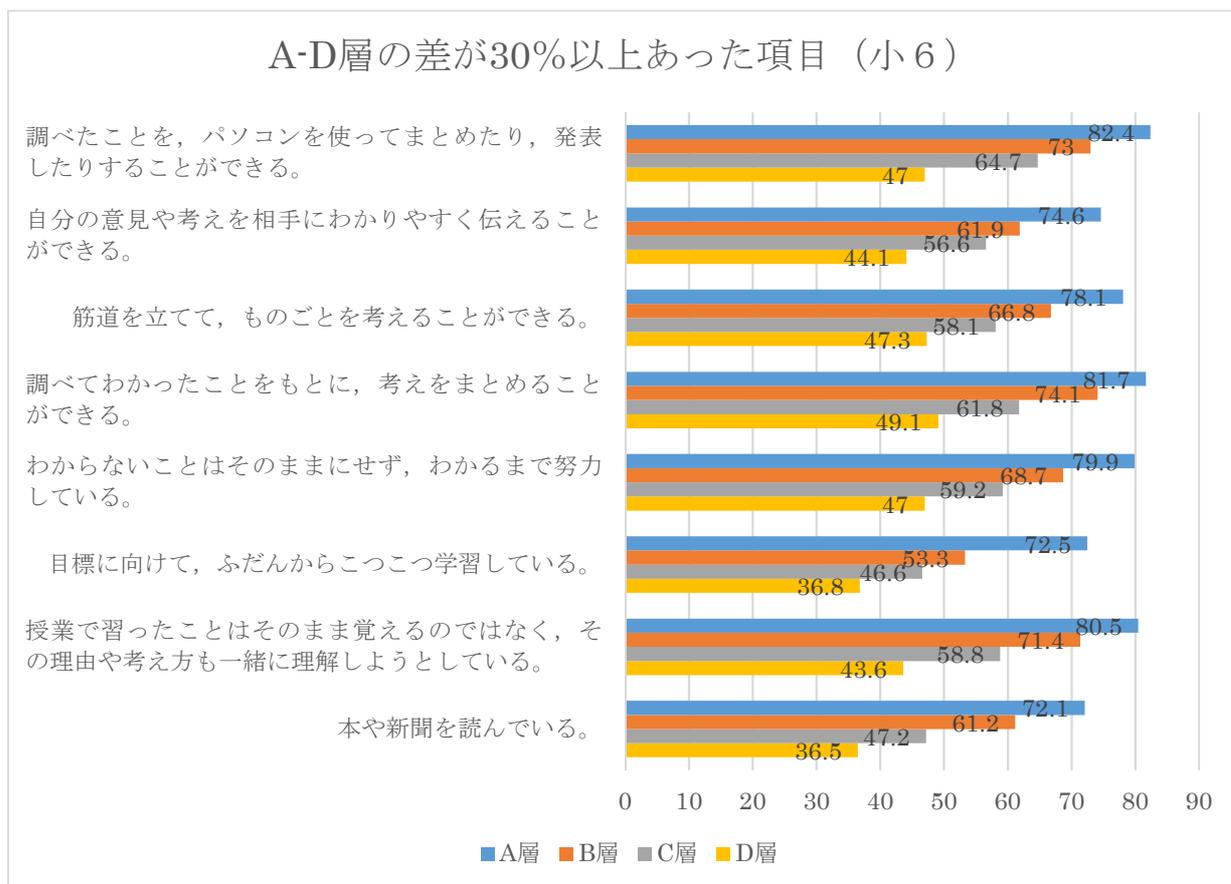
そこで、学力調査の結果だけではなく、学力調査と意識調査の相関についても着目し、考察する。

(1) 教科学力と学習意識のバランス

表6（小学校）と表7（中学校）は、本市の意識調査の中でも、特に学力との相関関係がみられた項目を表したものである。意識調査については、児童生徒自身の自己肯定感の尺度の違い等で回答が異なることもあり、これらは学力との因果関係を表したものではない。しかし、例えば、学習意識は高いが、教科学力が低い場合は、教科の指導改善・学習改善により教科学力（学びに向かう潜在力）を向上させられる可能性があり、逆に、教科学力は高いが学習意識が低い場合は、今後の学力の伸び悩みが懸念される。

このことから、学習意識と教科学力は学力向上を図る両輪として、そのバランスに着目・把握することにより、今後の取組の考察とするものである。

表6 意識調査において特に学力相関が強かった項目（小学校）

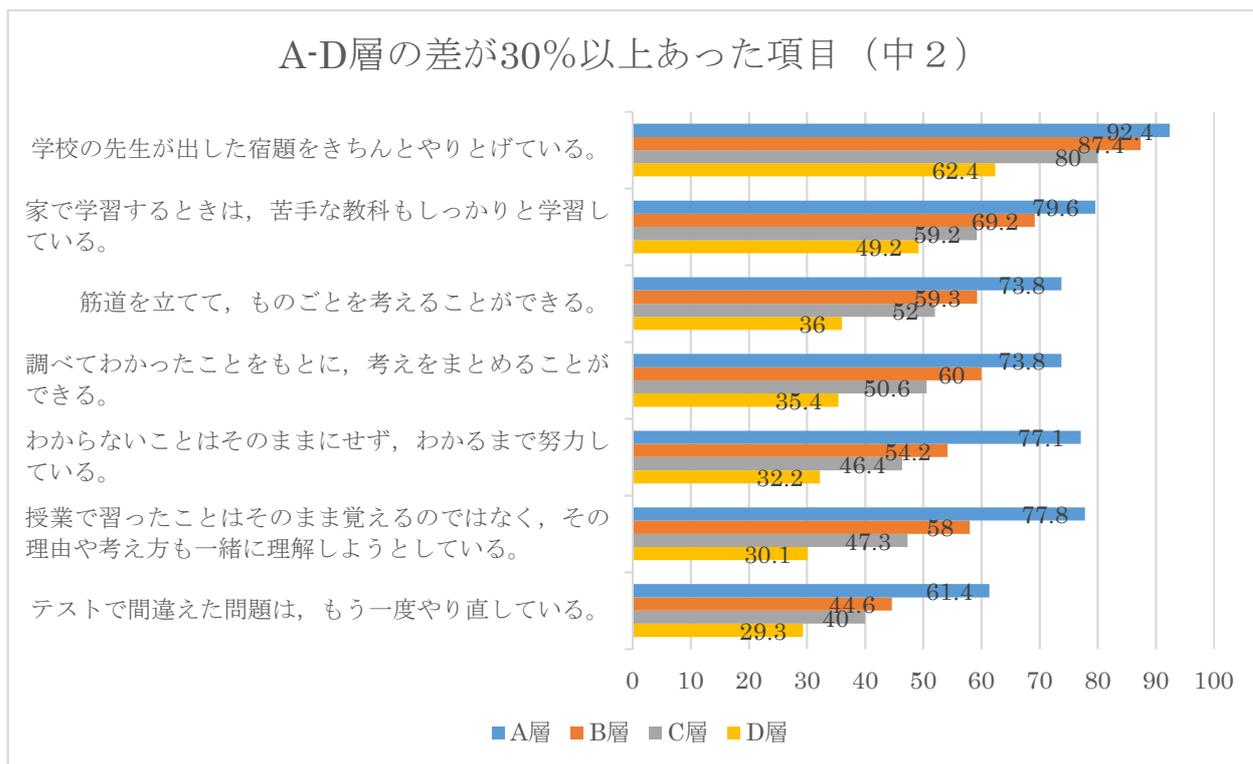


本調査から、学力上位層の児童の傾向として、次の点が挙げられる。

- ・情報や知識などを取捨選択して自分の考えを整理したり、根拠に基づいて考えたりしている。
- ・相手を意識し、伝えようとする内容を精査することで、相手にあった表現を工夫するなど、思考・判断・表現等深めている。
- ・日ごろから本や新聞等で情報を得ることで、語彙力を高めるとともに、ことばの意味を理解することで、多面的な見方・考え方を学んでいる。
- ・ICTを効果的に活用することで、より有効な学習方法を行っている。

これらの点は、授業において、単に与えられた課題をこなす（受け身）のではなく、学習の目的を児童自身が把握し、主体的に学ぶことによって得られる効果であると考えられる。学習課題を自分事として捉え、自分なりに本質まで理解しようとするのが、児童にとって知識・技能等の力となっているのではないかと読み取ることができる。小学校の最終学年で、これらの力を養うためには、発達段階に応じた学習を積み上げていくことが大切であると考えられる。

表7 意識調査において特に学力相関が強かった項目（中学校）



中学校においては、学力上位層の生徒の傾向として、次の点が挙げられる。

- ・家庭学習においては、効果的な学び方で進んで学習に取り組んでいる。
- ・論理的思考を高めることにより、情報の関係性を構造的に理解し、自分の考えを正確に伝えたり、課題解決につなげたりしている。
- ・既習内容は、積み残すことなく、確実に身につけている。

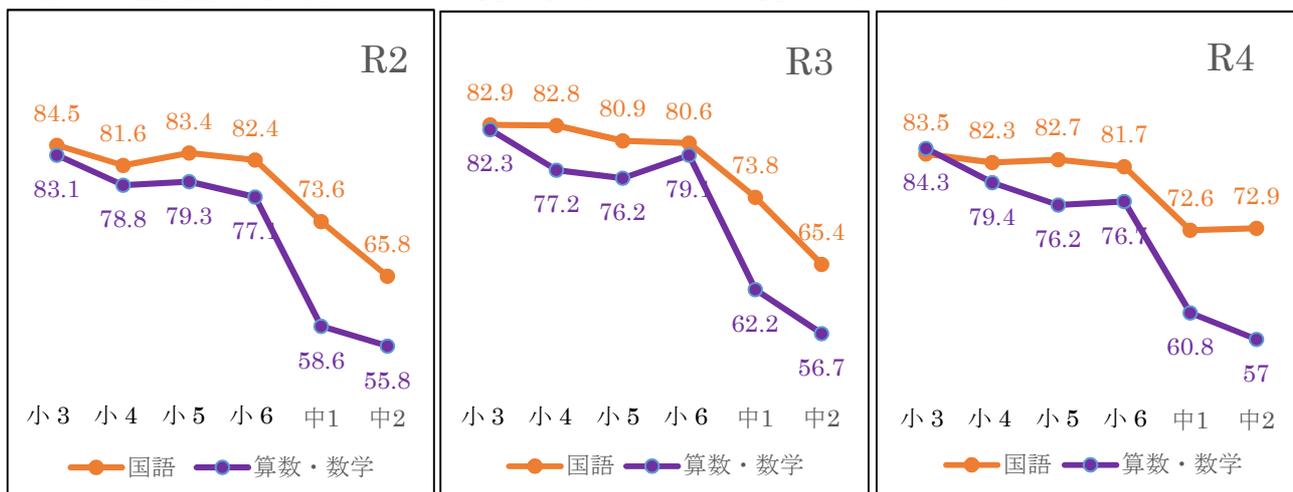
これらの点は、「主体的に学びに取り組む態度」の「粘り強い取組を行おうとする側面」「自らの学習を調整しようとする側面」である。授業においては、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って改善を進めていくことで、学習者が主体となる授業づくりをしていかなければならない。また、家庭学習の取組についても、タブレット端末を効果的に活用し、自分の力に応じた課題に取り組むなど、個別最適な学びができるよう、内容や方法も積極的に家庭に啓発していく必要があると考える。

(2) 意識調査における、教科の「理解度」と「好き嫌い」の肯定的回答の割合について

※教科は、国語（小・中）と算数（小）・数学（中）の2教科に着目

国語と算数・数学の「好き嫌い」において、「とても好き」「まあ好き」（小1～中2）と答えた割合と、同教科の理解度「よくわかっている」「まあわかっている」（小3～中2）と肯定的回答の割合が、学年が上がるにつれてどのように変化していくかに着目し3年間（R2～R4）のデータを比較し、発達段階に応じた支援等について考察したものである。

表8 理解度（「よくわかっている」「まあわかっている」と回答した割合）



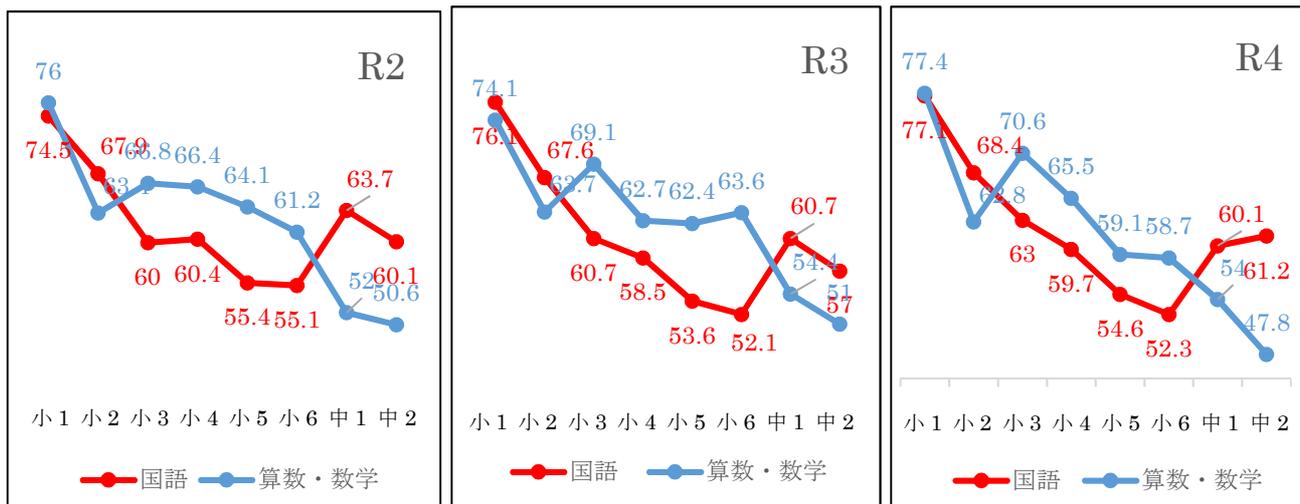
- 「理解度」の項目が入った小3の時点では、国語と算数の差がほぼ無い状況から、学年が上がるにつれて国語と算数・数学の差が開いてくる。（国語より算数・数学のほうが低い状態が続く。）
- 国語と算数・数学ともに中1で大きく落ち込んでいる。
- 大きく落ち込んだ中1から、中2はさらに下がる傾向にある。

国語と比較して、算数・数学が、学年が上がるにつれて理解度も下がる傾向にある。これは、算数・数学が、より積み重ねを必要とする教科であり、特に小5からは、比例や割合等、より抽象的な学習内容が増えていることや基礎からの積み重ねがないと応用ができないといったことが関係しているのではないかと考えられる。

また、中学校に進学した中1で大きく落ち込むのは、新しい環境や異なる生活スタイルになることに加え、より教科の専門性が高まるなど、心理的、文化的、学問的にも順応が難しい「中1ギャップ」が影響していることも考えられる。

中1で落ち込んだ理解度を中2で取り戻すことは容易ではなく、つまずきの早期発見・早期対応はもちろんのこと、9年間を見通した指導が求められる。

表9 好き嫌い（「とても好き」「まあ好き」と回答した児童生徒の割合）



○小1の時点では国語と算数の肯定的な回答の割合に、ほぼ差が無い状況から、小学校段階の国語では、学年が上がるにつれ、肯定的回答が減少している。また、算数では、小2で急激に落ち込み、小3で回復するが、その後は学年が上がるにつれて減少している。

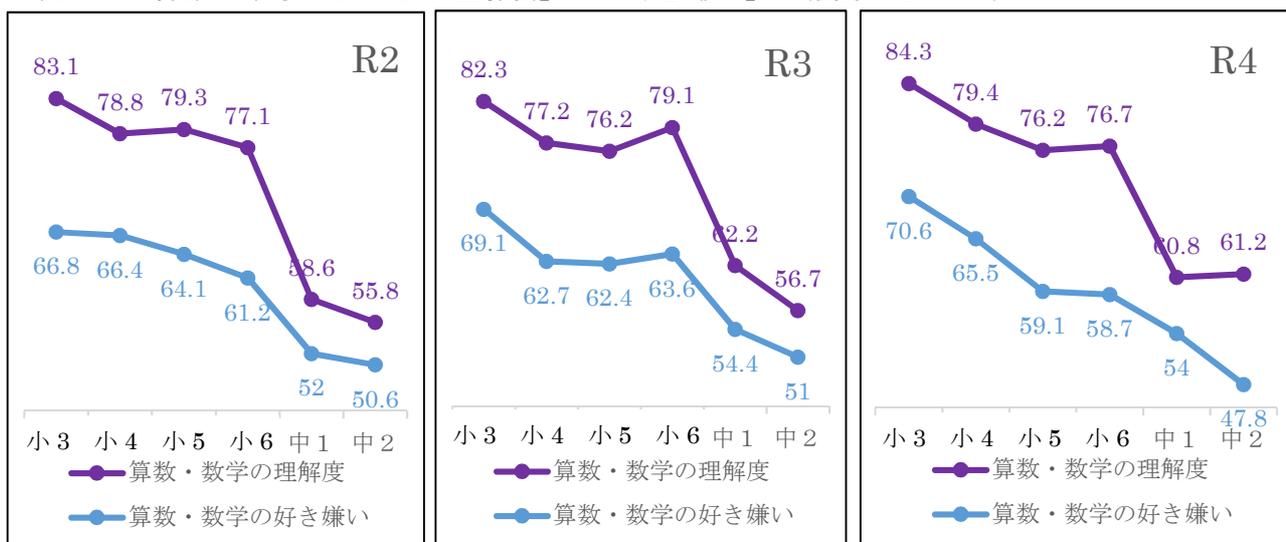
○小3の算数と中1の国語は、肯定的な回答の割合が増加している。

好き嫌いについては、学習内容や単元によっても分かれることが考えられるが、児童生徒の視点に立ち、「わかる」「できる」楽しさを実感できるように、児童生徒の実態等に合わせた授業や家庭学習等を進めていくことが、主体的な学びへとなっていくと考えられる。

また、算数で、小2から小3にかけて肯定的な割合が増加する要因として、小2以降の計算につまづかないために、徹底して九九を覚える学習からこれまでの学習を活用した内容に移行し、児童の興味や関心が高まることなどが考えられる。同様に国語で小6から中1で肯定的な回答の割合が増加する要因の一つとして、「文法」や「古文」「漢文」など体系的な学びが始まり、小学校のつまづきに関係なく学習を進めることができることがあげられるが、今後もこれらの要因については、引き続き学校からの聞き取りを行うなど、さらに検証を進めていく必要がある。

さらに、表7にある「理解度」と、表8にある「好き嫌い」の考察から、算数・数学における相関は、次の表10のとおりとなる。

表10 算数・数学における「理解度」と「好き嫌い」の相関（小3～中2）



○好き嫌いと理解度を比べると、折れ線グラフの形が酷似している。

○教科に対して肯定的な意識で学習することは、学習の理解につながっていると考えられる。

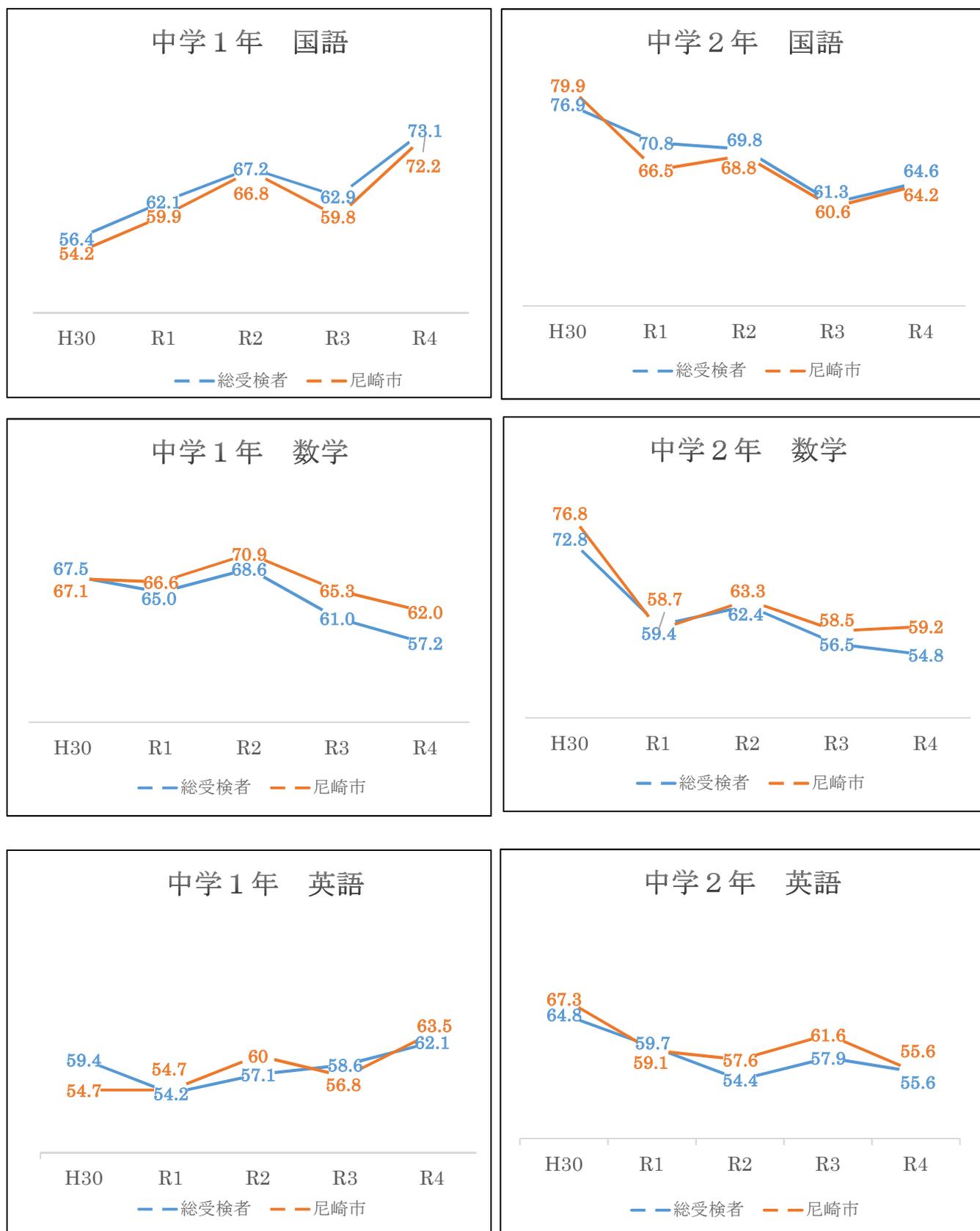
このことから、「わかる・できる」経験が「好き」につながり、さらに「わかる・できる」まで繰り返し学習するという好循環につながる。一方、「わからない」というつまずきを解消しないままにしていると、学習意識が低くなり、さらに「わからない・できない」状況が続き、嫌いになるという悪循環が起こってしまう。

「わかる・できる」を実感できる授業の展開と、つまずきの早期発見・早期対応ができる学習支援体制の整備が求められる。

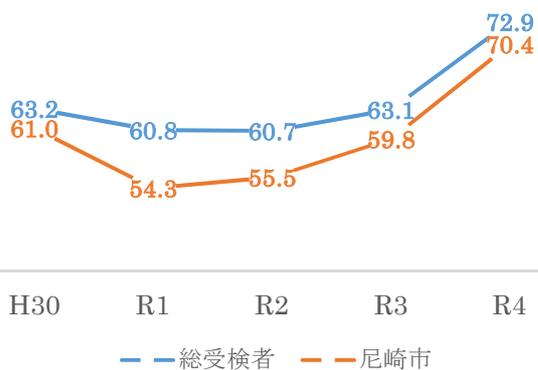
(3) 中学校における各教科の達成率(%)の推移について

中学校の経年変化をみると、教科別によるばらつきが大きくみられる。

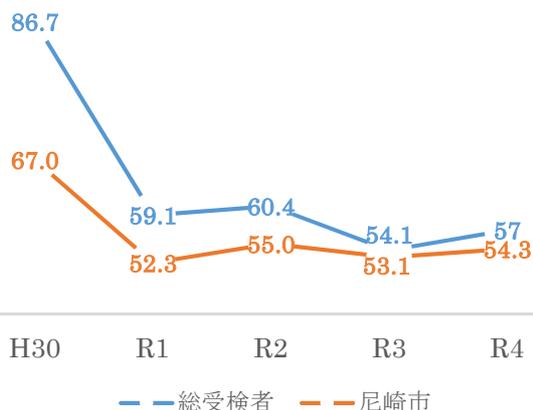
表1-1 中学校における、同一学年集団での総受検者と尼崎市の各教科の達成率(%)の推移



中学1年 理科



中学2年 理科



中学1年 社会



中学2年 社会



各教科において深く観点や領域ごとに傾向をみていくなど、授業と評価の一体化を図っていくことが必要であると考えます。

上記の市内全体の傾向に加え、各教科研究会で成果のあった学校の取組を分析・研究していくことを通して、自校の実態に応じた授業を展開していくことが求められる。

8 まとめ

あまっ子ステップ・アップ調査を開始して5年になり、市内全体において、D層の割合が年々減少しており、各校において、学力向上担当者や研究主任が中心となって、分析結果をもとに、授業改善や帯学習・放課後学習等の取組が展開されていることや、教育委員会が各校の工夫した取組を情報共有するため、管理職や担当者の研修を毎年行ってきた成果が出てきた。

さらには、令和元年から実施している複数の指導主事による「授業改善・学力保証推進チーム」の学校訪問については、授業参観を通して、学級、児童生徒、教員の様子や課題等を、管理職と教育委員会で把握・共有し、必要に応じて意見交換や指導助言を行うとともに、校長面談を通して、学力向上に係る学校全体のビジョンや取組の進捗状況等を共有し、取組の推進や改善を図るなど、学校と教育委員会が連携し、学力向上に取り組んできた。

そのような中、今回の考察で見えてきたことは、次の2点である。

- ①すべての児童生徒が、授業の中で、「わかった」「できた」を実感できるような、さらなる授業力の向上と個別最適な学びの提供が必要であること。
- ②義務教育9年間を見通して、計画的に、学びを支える基礎・基本を身に付け、つまずきがあるまま次の学年にあがらないための具体的な方策が必要であること。

この2点を推進していくために、まずは、児童生徒の学力と学習に対する意識の実態と、授業する教員の意識を一体として、どのような取組を行ったのか、その結果はどうであったのか、そしてその結果を次の取組にどのようにつなげていくのかというPDCAサイクルのもと、学校と教育委員会が協働していく。さらに、ハンドブック『よりよい授業をめざして』を活用し、さらなる授業力向上を図るとともに、校内研修や教科研究会の活性化等の取組を推進していくことを目指す。中でも、中学校社会科と理科については、達成率において総受検者との差が大きいことから、分析を踏まえた授業改善とともに、令和3年度から導入している「スタディサプリ」の効果的な活用等を通して、授業内容の確実な定着を図っていく。

複雑化・多様化する社会で、学校教育に求められることも広範囲になっている中、教育委員会は、尼崎市教育振興基本計画である「目標や希望を持ち 生涯を意欲的に 生き抜くことができる人」「人の気持ちや立場を尊重し 互いに協働・協力できる人」「多様な他者と協働して 主体的に地域社会に関わる人」を目指し、指導力の向上を図り、確かな学力を保証しながら、学校園・家庭・地域社会が一体となった教育・学習活動が促進されるよう努めていく。